

ヒグマとの対話

雪解けの遅い今年、春からヒグマとの遭遇事故が多く聞かれました。山菜採りのシーズンは、冬眠から目覚めたヒグマが人間以上に春を待ち望み、食べ物を探し求めて活動するシーズンです。ヒグマは山の奥に住むと思われがちですが、高山帯で活発に活動するのは、7月中旬から9月中旬ごろまでの2カ月ほどの期間です。

僕が勤務する上川町の高原温泉地区は、多くの水資源がヒグマの好む植生を生み出し、多くのヒグマが夏期に集まってきます。ヒグマは凶暴で肉食性の動物であるという印象を持ちますが、実は食べ物の多くを植物の芽や木の実に依存しています。

動物性の食べ物はアリや蜂の巣、エゾシカの死体などで、大雪山で自ら動物を襲って食べるということはほとんどありません。ヒグマ情報センターでは、6月から10月までの間、高原温泉高原沼めぐりコースで毎日登山道をパトロールし、ヒグマの個体確認はもちろん、足跡や食痕、糞（ふん）の痕跡などを調査記録しています。これらを入山する登山者に情報提供してヒグマとの遭遇を最小限にし、登山者と



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然解説員などで活躍する人々をリレーしています。

ヒグマとの事故を防ぐためのアドバイスや登山道の管理を行っています。

動物たちをはじめ、山の自然は無限の情報を発信し続けています。インターネットからは決して得ることのできない草花、土、水、空気の変化を感じ取り、ヒグマとの至近距離での遭遇を避けることを心がけて行動すれば、登山でのヒグマ事故はほぼ防ぐことが出来ます。

ヒグマは、われわれ人間以上に登山者の行動を良く見えています。謙虚な気持ちで山と向き合い、彼らに人間の存在をしっかりとアピールしながら大雪山へと出かけてみてください。

自然写真家

高原温泉ヒグマ情報センター巡視員 松野智久



山の主、ヒグマの軌跡



本で知るふるさと

松原岩五郎の大雪山

ふるさとの山、大雪山の山名が初めて記された本は、松原岩五郎が書いた「日本名勝地誌 第九編 北海道之部」です。1899（明治32）年に当時の博文館（東京）から発行されたこの本は、百余年を経て紙質がポロポロとはがれ始めているので、慎重に開いて読まなければなりません。

石狩国上川郡の記述の中に次のように登場します。

「山嶽中其高峻なるものを擧ぐれば大雪山（元又タカウシユベ）なり、旭嶽市街の東南十里に聳え海を抜くと八千餘尺、實は本道第一の高山にして峯頭七ツに岐れ（中略）白雪常に其上に被り」（108ページから）。

大雪山には、「だいせつざん」とふりがなが振ってありますが、次の109ページの大雪山のふりがなは「たいせつざん」と濁点がありません。だいせつざん、なのか、たいせつざんなのか。著者の誤記か印刷の誤植でしょうか、良く分かりません。

文中に「旭嶽市街」とあるのも「旭川市街」の誤記、もしくは誤植でしょう。いずれにしてもこの本には大雪山と旭嶽（旭岳）の山名が期せずして登場していたのです。

鳥取県出身の松原岩五郎の本として「最暗黒の東京」（岩波文庫）が

あり、その本の解説（立花雄一）の中で大雪山の山名の起こりを次のように説明しています。

「伯耆（ほうき）富士の名のある、故山（ふるさとの山）の大山（だいせん）に山容が似ていたから、大山に因んで、その名を採ったという」。そうであれば、大雪山にはだいせつざんとふりがなを振ったに違いありません。

旭川東高校教諭で山岳救助や山スキーなどに活躍された速水潔さん（2003年死去）は著書「冬山」（北海道新聞社発行）で大雪山と旭岳の山名由来をさまざまな角度から書いています。

中国にも大雪山があり、山麓に生息するパンダが日本に贈られて来るのが最適だと、上野動物園など全国の動物園に先駆けて旭川が名乗りを上げことも紹介しています。

町史編さん専門員、西原義弘



大雪山の名が初めて登場した「日本名勝地誌 第九編」（博文館、1899年刊、変形B6版498頁）、命名のいわれが載っている「最暗黒の東京」（岩波文庫、1988年刊、A6版200頁）、そして速水潔著「冬山」（北海道新聞社、1977年刊、B6版261頁）